

安全指導研究部会

I 研究テーマ

「安全教育の今日的課題」～子どもの安全を考える～

II 研究テーマ設定の理由

私たちの部会では、子どもたちが少しでも自分で自分の身を守ることができる力をつける安全教育のあり方を研究し、様々な実践をしてきた。子どもたちが安全マップを作り、どのような場所が危険で、どのような対処をしていけばよいのかを考えさせることで、安全に対する意識を高めるという実践や、完成した安全マップの発表を通して、自分たちの地域にもある危険な場所を、少しでも安全な場所に変えていくためにはどうしたらよいかを考えたり、地域を安全にするための働きかけを行ったりする実践をしてきた。それら活動は、教材作りの段階でアドバイスをもらったり、授業にゲストティーチャーとして招くなど、地域の方や保護者を協力を支えられたものであった。

東日本大震災を契機に、交通安全教育、防犯教育だけでなく、防災教育にも目を向けてきた。平成 23 年度には子どもたちが安全マップを使って、地域で考えられる危険から自分を守るための方法を考えた。また平成 24 年度には、実際に地震が起こったときに、どのように 1 次避難をすればよいのかを、子どもたちがマップ作成を通して考えた。さらに保護者も参加し、一緒になって子どもの安全について話し合ったり、平成 25 年度には、市や地区の防災担当の方を招いて、実際の災害の時、行政や地区がどのような動きをするか、そのための訓練や用意をどのようにしているかを子どもたちが学ぶ機会を持つことができた。

そこで今年度はこれまでの防災教育の実践の成果を生かして、より地域の特色やその学校の実態を意識し、講師を学校に呼ぶのではなく、子どもが自分の地域に出て、直に地域の危険を見つめるように考えた。

このように本部会では、「子どもたちが考える安全教育」、「地域や保護者とつくる安全教育」を作り上げてきた。「安全教育の今日的課題 ～子どもの安全を考える～」をテーマにして 10 年目の今年度は、昨年度の研究をさらに深めていった。

III 研究の経過と内容

1 研究の経過

- | | |
|-------|------------------------|
| 4月10日 | 役員選出 研究テーマ設定第1回安全指導研究会 |
| 5月15日 | 研究方法の検討 研究計画の詳細確認 |
| 6月7日 | 臨地研修・フィールドワーク（里垣小学区） |
| 8月7日 | 指導案検討 |

8月20日	指導案検討・資料収集（甲府市立図書館）
9月4日	研究授業
10月2日	研究授業の反省
11月4日	保護者との連携部会との合同研究会
1月27日	一年間のふり返り

IV 地域安全マップを作ろう 授業実践(里垣小6年生)

(1) 指導目標

- ・防災・防犯への関心・意識を高める。
- ・地域の「潜在的な危険」を認識し、注意点や対処法を考える。

(2) 学習の経過

[第一次 オリエンテーション]

- ・防災や防犯に関心をもつために、災害について家族や地域の人に聞いてきたことを発表したり、新聞を読んだりする。そこから危険箇所を探す判断基準となるキーワードを考えた。

[第二次 フィールドワークの計画を立てる。]

- ・安全マップ作りに向けて、自分たちの地域で考えられる危険について、グループで話し合った。「防犯」「自然災害」「水害」の三つのキーワードをもとに、方面別に分かれたグループで危険のありそうな場所、危険の種類などについて話し合い、後日のフィールドワークの計画を立てた。
- ・実際に里垣地区のフィールドワークを実施した。計画では「危険」と判断した場所が、「思っていたほど危険ではなかった」と感じられたり、気付かなかった新たな危険な場所を見つけたりすることができた。

[第三次 安全マップを作成する]

- ・調べてきたことをもとに、それぞれの方面別グループが、白地図に安全な場所や注意が必要な場所をコメントやイラストを入れながら、安全マップをわかりやすく作成した。そして各グループが自分たちの安全マップを発表した。

(4) 研究会から

- ・地図を読み取る力が大切だと感じた。地図だけでは話し合いを進めることが難しいので、方面ごとの写真を配布したのは、子どもたちの思考の手助けとなった。
- ・学習の中に地域の方から話を聞いたり、インタビューをしたりする活動を取り入れてもよかった。より地域に密着した「生きた」情報が得られるのではないか。
- ・昨年度までのとりくみの中で実践した内容と重なるが、それも児童や地域の実態によるものなので当然のこと。今後どのようにその実態を変化させていくかが大切である。
- ・子ども達は地域について興味を持ち、活動できていたように思う。自分たちの住む地域

を好きな子、愛着を持っている子が多いと感じた。

- ・時間はかかったと思うが、実際にフィールドワークに行って、学習のまとめにつなげることがよかった。計画的に思考→判断→表現という流れで進めることができた。
- ・フィールドワークは子どもたちそれぞれの意識を評価できるものだった。教室での話合いを経て自分の身近な事としてとらえられた子は「潜在的な危険」を探し出そうと精力的に活動し、理由付けも明白でわかりやすいものだった。
- ・「危ないことは理解している」「自分だけは大丈夫」という意識は子どもだけでなく、大人にもある、今回の授業では、少しでも「危険なこともあるな」と意識づけられたことは大切なこと。今回だけで安全指導を完結させることはできないが、このような取り組みが子どもたちの危機回避能力を高めていくことになる。
- ・過去の災害では、里垣小学校の体育館が避難所として実際に使用された。このように子どもの身近なことを出していくことで、過去の災害がもっと身近なものとしてとらえることができる。その掘り起こした資料を教材化することやそこに地域の方の実体験に基づく話を取り入れるなど、人材の確保や地域教材の保存を進めていくことは大切である。

IV 研究の反省と課題

今年度は昨年度までの実践を整理し、他の地域での安全教育を考えてきた。地域によって考えられる危険には違いがある。その地域の様子を観察し、その地域に応じた安全教育を考えることが必要とされている。そのためには「地域を知る」ことが大切である。そこで本年度は部会員全員で教材化していく地域をフィールドワークし、複数の視点で地域を観察し、危険な箇所を確認したり、過去にどのような災害があったかを知るために、図書館の資料室で新聞や公式文書などの過去の災害資料を調査した。教師の事前研究としてのフィールドワークの必要性和授業で子どもたちが現地を見、実物に触れるフィールドワークの有効性を知ることができた。

また、防災は「自助」「共助」「公助」の3つの要素があると言われている。今年度の授業実践では、子ども自身が地域を知り、「どうやったら安全に過ごせるか」「危険から身を守ることができるか」を考えた。本部会が主張する「子ども自身が考える防災教育」は、「自助」「共助」の意識を高める素地になるのではないだろうか。

昨年は、冬の歴史的な大雪、広島のと砂災害、御嶽山の噴火など多くの災害が日本を襲った。安全教育の必要性はますます高まっている。今後も着実な実践を続けていきたい。